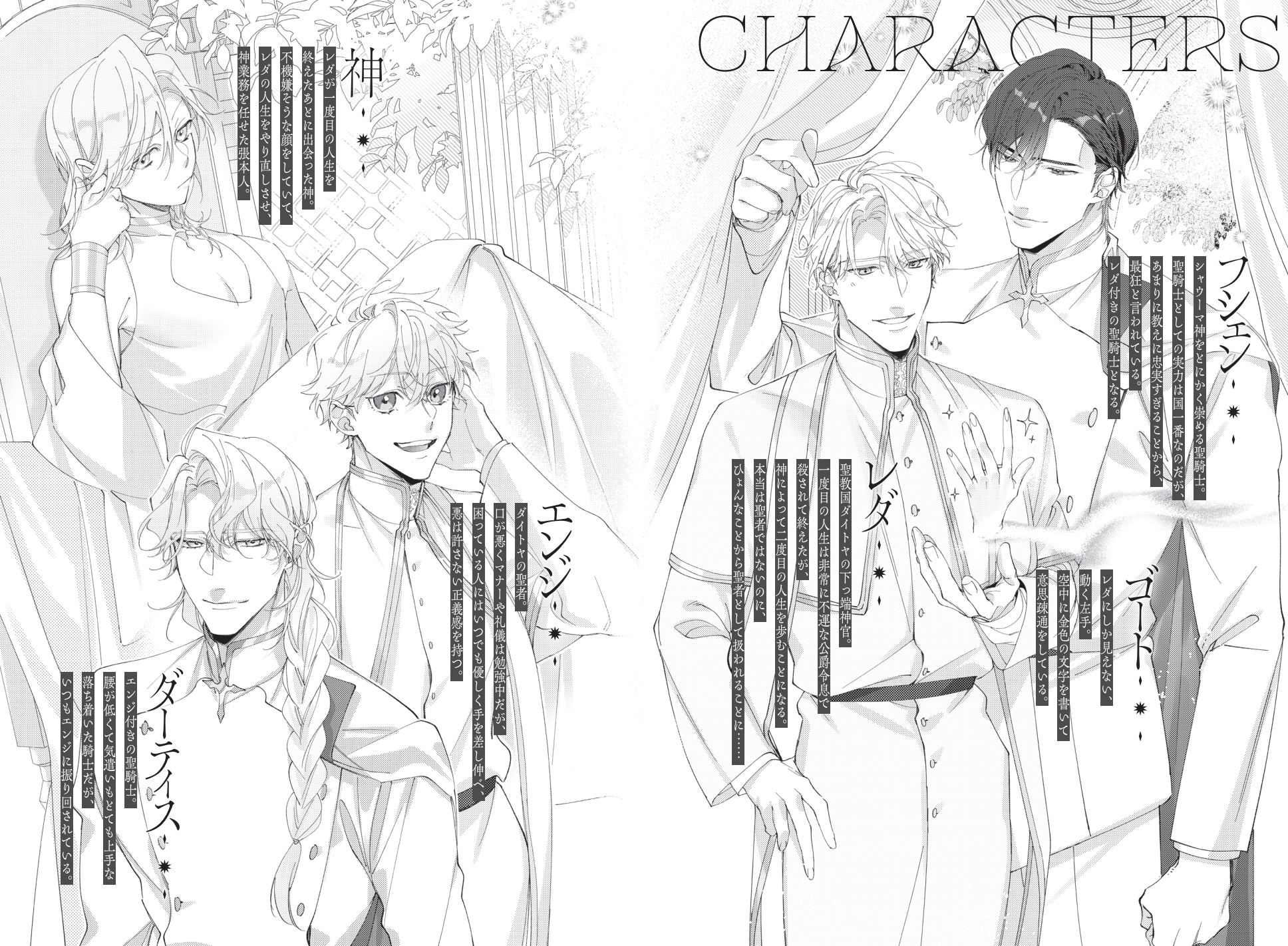
嫌われ偽聖者の俺に、最狂聖騎士が死ぬほど執着してくる

CHARACTERS



フシェン

シャウーマ神をとにかく崇める聖騎士。
聖騎士としての実力は国一番なのだが、
あまりに教えに忠実すぎることから、
最狂と言われている。
レダ付きの聖騎士となる。

ゴート

レダにしか見えない、
動く左手。
空中に金色の文字を書いて
意思疎通をしている。

レダ

聖教国ダイトヤの下っ端神官。
一度目の人生は非常に不運な公爵令息で
殺されて終えたが、
神によって二度目の人生を歩むことになる。
本当は聖者ではないのに、
ひょんなことから聖者として扱われることに……

神

レダが一度目の人生を
終えたあとに出会った神。
不機嫌そうな顔をしていて、
レダの人生をやり直しさせ、
神業務を任せた張本人。

エンジ

ダイトヤの聖者。
口が悪くマナーや礼儀は勉強中だが、
困っている人にはいつでも優しく手を差し伸べ、
悪は許さない正義感を持つ。

ダーティス

エンジ付きの聖騎士。
腰が低くて気遣いもとても上手な
落ち着いた騎士だが、
いつもエンジに振り回されている。

第一章　偽聖者は後悔する。

「な、なぜ……光っている？」

語尾の震えた声が、静まり返っていた空間に響き渡る。その声は、この教会堂の司祭のものだ。

司祭の震える指先が示すのは、俺の手にある、片手ほどの大きさの透明な玉。それは七色の輝きを放っていた。

「そ、その……」

ああ、まずい。やらかした。

俺はそこで初めて、自分がやらかしたことの重大さに気付いた。

ここは、聖教国ダイトヤ。シャウーマ教会が治める宗教国家で、俺はその辺境にある、ここコラルカ教会堂で、下っ端神官として働いている。

今俺がいるのは、壁と床一面が白色で統一された部屋だ。窓は天井にのみあり、カーテンなども一切ないこの部屋には、容赦なく陽光が降り注いでいる。

【聖の間】と呼ばれているここは、通常は限られた時期にしか開かない部屋だそうだ。そこが今回開かれたのは清掃のため。

だからか、俺以外の神官も多くおり、彼らも同じく先ほどまで清掃をしていた。
「おお神よ……偉大なるシャウーマ神よ」
俺の近くにいた別の神官が、俺を見ながら嘆くように小さく祈りの言葉を呟く。彼らは冷たい視線と嫌悪の表情を向けていた。灰色の髪と空のような青い瞳の俺が、まるで悪魔にでも見えていることだろう。
聖教国ダイトヤは宗教国家であり、他国と比べると建国の成り立ちが特殊だ。
遥か昔、荒れ地しかない土地に住んでいた一人の青年が、幸せな国で暮らしたいと神に願った。それを聞いたシャウーマという神が、願いを叶えるために建国したと言い伝えられている。
つまり、この国の頂点はシャウーマ神であり、初代皇帝でもあった。
この国の住人の大半は、シャウーマを唯一神として崇めるシャウーマ教の熱心な信者で、毎晩聖典を片手に祈りを欠かさず過ごしているのだ。
しかしシャウーマ神は約五百年前に地上から姿を消した。
その際、玉座に人がつくことを許さず、神の声を聞ける者を【教皇】とし、国を治める代理人として残した。つまり、現段階では教皇がこの国の頂点に位置しているというわけだ。
そして、教皇と同等にこの国で崇められる存在――それが【聖者】だ。
「そ、それは【聖遺物】だぞ！」
「そ、そのようですね……」
それ、というのは、俺が手に持っている光る球体のことだ。

聖遺物とは、シャウーマ神がこの世界を去る前に残した遺物で、いろいろな力を秘めていると言われている。しかし、普通の人間がそれに触れても、聖遺物が反応することはない。
その聖遺物を動かし、操ることができるのは、神に愛された聖者だけなのだ。
この教会堂の下っ端神官である俺は、司祭に命じられてこの球体を掃除しようとしただけだった。台座に飾られていたとはいえ、光る前は薄汚れた球にしか見えなかったのだから。
本当にこれが聖遺物だと知っていたら、絶対に触らなかった！
司祭は今にも泡を吹きそうな顔色で、震えた指先を俺に向ける。
「せ、聖者様は一人しかいない！　わ、わかっているのか！」
司祭がこれほど慌てているのには訳がある。
聖者はこの世に一人しか存在しないはずだからだ。
聖者というのは、先代聖者が死亡した瞬間に新たにこの国に生まれ落ちる。
だからこそ教会は、どんな生まれでも十歳で洗礼式を受けさせることを法で定め、洗礼式で聖者を見つけて保護するのだ。
聖者か否かを見分ける方法は簡単だ。聖遺物を反応させられるかどうか。
しかし、その今代の聖者はすでに見つかっている。だというのに、俺が聖遺物を反応させてしまったから、こんな大騒ぎになっているというわけだ。
「……まさか、こんなことが」
「しかも、光らせたのが、あの問題児……」

「元公爵家子息のレダ・ヴァルギース……」
辺りにいる神官たちのざわめきが聞こえてくる。どうやら悪い意味で有名な俺を知っている者は多いようだ。
「彼が聖者様のはずがありません」
見知った顔ではあるが名前は知らない神官が、突如口を開いた。
「聖者様は心も清らかであるはずです！　レダ神官は相応しくありません！」
彼の言葉は止まらず、徐々に声を張り上げる。
当の本人を目の前にして、よく言えるものだと感心する。
いや、嫌みとかではなく、素直に感心している。問題点をすぐに訴えることができるのは素晴らしい。こういう人間が好感度を得られるのかもしれない。勉強になる。
「彼はシャウーマ神の像を壊して回り、気に入らない神官たちには水やゴミをぶちまけて暴れ、我々を困らせているのですよ！」
神官は怒り心頭といった様子で、忌々しいとばかりに吐き捨てる。そして、他の神官たちも同意するかのように頷き、俺へ鋭い視線を向けた。
さて、これには反論がある。
彼らが挙げた悪行だが、それらはすべてただの事故だ。例えば、シャウーマ神の像を壊して回り、ということだが、あれは老朽化によるものだ。
俺が清掃を任されたものは、ひび割れが凄まじく、清掃した際に偶然、壊れて崩れ落ちた。ただ、任されたすべての像が崩れたので、壊したと疑われるのも仕方ないとも言える。
次に、ゴミや水をぶちまけて暴れる、というもの。
これに関しても、ゴミを捨てようとして運悪く風で飛んでかかってしまっただけで、悪意は一切ない。必死に謝罪したが、相手は最後まで聞かずに去った。
俺にとって、こういうことは日常茶飯事だ。いつも不運が重なり、他人に悪印象を持たれたり、誤解されたりしてしまう。
「ええと、それらは偶然から起きた悲しい事故です」
「信じられるものか！」
やはり何を言っても無駄だ。俺は弁解しても誤解は解けないと知っている。しかも無理に誤解を解こうとすればするほど、更なる誤解を生むような不運が起こって悪化する場合が多い。
俺がどんなことをしようとも、好意を向けられることはないのだ。
――これは呪いのような〝罰〟だから。
「おい、本当か……？」
「レダ神官が？」
「どうやって……」
神官の訴えで、聖の間にいた他の神官たちが一層騒がしくなる。
どうやら、俺が聖者だと信じている者はほぼいないようだ。疑うような、嫌そうな声ばかりがあちらこちらから聞こえてくる。

「もしかして、公爵家が手を回しているのでは……？」
違う。実家との縁はとっくの昔に切れている。
「いや、レダ神官が聖遺物に何かしらの手を加えたのでは？」
違う。本当に俺は触れただけだ。なんの手も加えていない。
「まさか、本当に……彼こそが本物の聖者だというのか……」
それも違う。俺は、聖者ではない。
――俺は偽物なのだ。
実は、今見つかっている聖者が偽物で、後から出てきた俺が本物……なんて展開は一切ない。最初に見つかった聖者が正真正銘本物であり、俺はただの偽物、つまり偽聖者だ。
――そうであることを、俺は知っている。
とにかく、このままでは前例のない二人目の聖者にされてしまう。いや、その前に興奮した彼らによって、聖者を騙った悪党として処罰されそうだ。
さすがに、殺されるのはもうごめんだ。
「聞いてください、これは！」
俺が声を張り上げたと同時に、聖の間の扉が勢いよく開かれた。
この部屋の扉は鉄製の両開きになっており、重くて開けにくい。神官たちが二人がかりでようやく開けられるくらいだ。
それを普通の扉のように軽々と開き、入ってきた男がいた。

夕闇のような黒色の髪は癖がなく真っ直ぐで、手入れが行き届いていて艶めいている。部屋全体を俯瞰する翠色の瞳は鋭さを宿しているが、口許に浮かぶ優しい微笑みがそれを打ち消していた。
そいつの顔を見た俺は、ぞわりと肌が粟立つのを感じた。
「今の話、すべて聞かせてもらったよ」
彼の通りやすい声は聖の間に響き渡り、神官たちの視線はすべてそちらを向く。
「あ、あの方は、イザリオティス卿……！」
「今、この教会堂を訪れているとは聞いていたが……」
神官たちの声と表情には、困惑と畏怖が交じっていた。
今入ってきた彼の名前はフシェン・イザリオティスという。
フシェンは、この国で数少ない【聖騎士】だ。
シャウーマ教の敬虔な信者で、他者より優れた力を持つ騎士は、教皇から聖騎士という称号を与えられる。
聖騎士として認められた者は、今のこの世に数人しかいない。
聖教国が誇る精鋭、他国から見れば化け物。そのうちの一人が今現れた男、フシェンだ。
しかもフシェンは、聖騎士たちの中でも一番名が知られている。
彼は聖騎士の中でもっとも強いとされながら、最強ではなく「最狂」という呼び名がついていた。
彼のことを語るのに有名なのは、アリア教会堂の大虐殺だ。
昔、辺境にあったアリア教会堂の神官たちが、シャウーマ神の教えに背き、裏で人身売買に関

わっていた。教皇から処罰を任されたフシェンは、アリア教会堂の神官を一人残らず殺した。
普通の聖騎士であれば、首謀者の首だけを落として、その他を破門にする程度で終わるところを、フシェンは神に背いた彼らを一人たりとも許さなかったのだ。
まさに、神に忠実な狂信者という言葉がぴったりだった。
「い、イザリオティス卿」
彼の姿を見るなり、司祭の表情が凍りつく。
逆に対峙しているフシェンは、微笑みを絶やさない。
早足で一気に室内の中心まで進み出ると、神官たちの顔を見回した。
最後にこちらに視線を向けたが、俺はあの作りもののような目を見るのが嫌で、咄嗟(とっさ)に視線を逸らした。
「彼が聖遺物を輝かせたのは事実だ。ならば、その時点で彼は聖者として仮認定される。あなた方の不満も聞いたが、これは個々の感情で決定できることではないよ。わかっているね？」
フシェンの言葉に、神官たちは黙りこむ。この場で反論できる度胸のある者はいなかった。
聖騎士は、教皇から悪を処断する権利を与えられている。簡単に言えば、聖騎士は人殺しを許可されており、教会内であろうと帯剣が許されているのだ。
その中でも神に忠実なフシェンに、真正面から口答えできるような人間は、この場にはいなかった。
「この件は私が預からせてもらう。私が、彼が真の聖者であるかを確かめると約束するよ。これで

いいかな、司祭」
フシェンの問いかけに、司祭は壊れた玩具のように頭を上下に振り続ける。誰も口を開かない。
先ほどの騒ぎが嘘のように室内は静まり返っていた。
しかしその時、俺は刺さるような視線を感じ、そちらに目を向けた。
俺が聖者に相応しくないと訴えた神官が、怒りに満ちた形相でこちらを睨(にら)みつけている。どうやら俺は、あの神官にかなり嫌われているらしい。とはいえ、いつものことだ。
「……うん、なるほど」
俺たちが見つめ合っているところに割りこんできたのは、フシェンだ。
互いの視線を遮るような位置で立ち止まった彼は、徐(おもむろ)に帯剣へ手を伸ばした。
かすかな金属が擦れる音と共に引き抜かれた剣は、天井から差しこむ陽光によって美しく輝いている。その鋭い剣先を見て、この場にいたほとんどの人が息を呑んだ。
――なぜ、突然剣を抜くんだ。まさか誰かを殺すつもりなのか。
無意識に体が強張ったのは、俺だけじゃないはずだ。
しかしそんな俺たちの気も知らず、フシェンは翠色の目を細めて、口許を緩めた。
「あなた方の気持ちはわかる。だが、聖典の第六章の一節にもある。【同胞は、憎しみ合うことなかれ】と。だから――」
そして剣舞でも踊るように軽やかに剣を反対の手に持ち替え――真っ直ぐ自分の掌を貫いた。
「うっ！」

「何してっ！」
「ひっ！」
様々なところから小さな悲鳴が上がる。
当然、フシェンの手からは血が流れ出し、掌から手首に滴り床へ落ちる。その光景は見てるだけでこちらまで痛い。真っ赤な血が滴り落ちる音が、やけに大きく聞こえた。
――何を考えているんだ、この男は！
誰もが唖然として、次の言葉を失う。
しかし、フシェンは眉一つ動かさずに刺した剣を引き抜くと鞘に戻し、血まみれの片手を天へ掲げた。
「私が、あなた方の代わりに憎しみの罰を受けよう。この痛みと血に免じて、憎しみを抱くのは終わりにしてほしい。シャウーマ神に仕える信者たちよ」
その言葉を聞いた神官たちは、はっと目を見開く。俺を睨んでいた者たちは、恥じるように俯いてしまった。
そして少しの沈黙の後、神官たちが手を叩き始めた。初めは疎らだった拍手が段々と大きくなり、俺を除くこの室内にいる全員が手を叩く。
自分の身を犠牲にしても、シャウーマ神の教えを伝えようとした偉大な聖騎士。彼らはきっとそう思っているのだろう。
しかし俺は、フシェンにはそんな崇高な目的などないと確信していた。

あいつは自分の手を刺す瞬間、とても嬉しそうに笑っていた。まるで心の中にある喜びが弾けて、飛び出したかのように。
口角は上がり、彼の翠色の目は希望を見出したように輝いていた。
あれは、決して自分の手を刺す人間がするような顔ではない。あいつは間違いなく、自分の手を刺すことを喜んでいた。
フシェンは、神官たちの喝采を受けながら、俺のほうに近づいてくる。
そして俺の前に跪いた。
そこで俺は我に返る。フシェンの強烈な存在感に呑まれかけていたが、このまま流されると俺は聖者ということになってしまう。
それだけは阻止しなければならない。
「……この場を収めていただいて感謝いたします、イザリオティス卿。ですが……っ？」
そこまで言って、思わず言葉を止めた。跪いていたフシェンの表情が一変したからだ。
彼の目は俺を見つめたまま見開かれ、驚愕の表情のまま凍りついている。
まるで死人にでも会ったかのような反応だったが、すぐに消えたかと思うと、彼は笑った。
頬は紅潮して、愛しい恋人に向けるような蕩けた笑顔だった。先ほど浮かべていた微笑みが無感情だったと思えるほど。
「ああ、なんて……」
フシェンの掠れた声は甘く蠱惑的で、翠色の目はどろりと濁って見える。

頬には自傷した血がかかっていて、片手からはいまだに血が止まらず流れ続けているのに、瞬きさえ惜しむように俺を一心に見続けていた。
彼に異様で理解できない熱量を向けられ、背筋にぞくぞくと悪寒が走る。もう言葉を継げなかった。
――なんだ、急にどうしたというんだ。
「聖者様。ご存じだと思いますが、あなたの身を守ることを許されているのは聖騎士だけです」
フシェンの言う通り、聖者の護衛につけるのは聖騎士だけと決められている。
聖者付きとなった聖騎士は、どんなことがあろうと聖者の命を守ることが優先される。そのため、どんな場所にでも同行し、自身を盾にするのだ。
つまり聖者と聖騎士は切っても切れない関係と言える。
「このフシェン・イザリオティスが、どのような敵からも、この命をかけて聖者様をお守りすると約束します」
フシェンはそう言って俺に手を差し出す。その手は先ほど剣で貫いたほうの手だ。自らの血で真紅に染まった手が、俺に差し伸べられる。
こいつの血に染まった手を見るのは、これで二度目だ。
ただ、その時に染めていた血の持ち主は、こいつではなく俺だった。
「どうか、私をあなたの聖騎士としてお認めいただけますか？」
認める、とすぐに言えなかった。

彼の手を真っ赤に染める血を見て、胸に突き刺さった剣の感触と痛みを思い出したからだ。
反射的に身が竦んでしまったのは、仕方ないだろう。
――なぜなら俺は、一度目の人生でこいつに殺されているから。

◆◆◆

俺は、生まれつき運のない男だった。
この国唯一の公爵家、ヴァルギース家の次男として生まれたが、母親は俺を産んだことが原因で命を落とした。
父親は母親が死んだ原因となった俺が憎かったのだろう。物心ついた頃には別邸に押しこまれ、父親が住む本邸を訪れることを禁止されていた。
別に虐待はされなかった。別邸にいても金の援助はしっかりあったし、必要なものは与えられていた。
ただ、父親は俺を徹底的にいないものとして扱った。彼が俺に会いに来ることは一度もなかった。
その頃くらいに、俺は自分自身がとてつもなく不運な人間なのだと自覚した。
両親の代わりに育ててくれていた乳母はすぐに他界し、その後やってきた使用人は父親に捨てられた俺を毛嫌いした。
別に殴られたりはしなかったが、彼らも俺をいないものとして扱った。その状況は、俺が使用人

の名前を一人も知らなかった、と言えばわかってもらえるだろう。
これだけでも十分と言える不運さなのだが、これだけでは終わらない。
友人を作ろうとすればなぜか金目当ての盗人ばかりで、先生を呼んで剣を習おうものなら数回に一度は剣が折れ、さらにその剣先が先生に毎度向かうのでわざとだと恐れられ、すぐに逃げられた。
他にも大なり小なり不運は絶えず俺に襲いかかり、大抵が俺をより孤独にするように、より嫌われるように作用した。
だから、俺は愛を知らない。
友人も親も兄弟も先生も、いたことがない。全部不運が奪っていくからだ。
挙句の果ては、俺が成人してからしばらくして、父親と跡継ぎであった兄が流行り病で死んだ。
その時、公爵家を継げる者は俺しかおらず、まさかの俺が爵位を継ぐことになった。
しかしこれが、更なる不運を呼ぶことになる。
爵位を継いだ時点で、公爵家の財政は取り返しがつかないことになっていたのだ。
それでもなんとかしようと自分なりに力は尽くしたが、所詮はなんの教育も受けてない若造だ。
家臣たちの裏切りもあり、あっという間に財政破綻。俺が公爵家の全員を殺し、公爵家を壊したのだと、噂されるようになった。
結局、ありがたい神託とやらで俺は教皇から異端者と認定され、聖騎士たちの手で処刑された。
これが、俺の一度目の人生の顛末。
――その時の遺言が「神様のクソ野郎、役立たずが」だったのがまずかった。

図らずも、それがこの二度目の人生の始まりとなったのだ。

◆◆◆

「やはり神なんて、クソ野郎だ」
俺はベッドに寝転び、顔をシーツに押しつけながら罵倒した。
ここは教会堂にある自室だ。自室と言っても部屋はかなり狭く、あるものと言えば少し大きめのチェストとベッドくらい。それでも一人部屋というだけで贅沢なほうだ。
あの後、俺はフシェンの問いかけには答えず、「考えを整理したいから一人にしてほしい」と告げて逃げた。聖の間を出る際に何度か呼び止められたが、すべてを無視して自室に飛びこんだのだった。
――フシェン・イザリオティス。
彼こそが、一度目の人生で俺を殺した、いや殺してくれた男だ。
一度目の人生でシャウーマ教会に異端者と認定された俺は、火あぶりの刑に処されることとなった。
火あぶりは相当苦しい刑であり、俺も酷く苦しんで死ぬ予定だった。
しかし、そうはならなかった。
なぜなら、火をつけられたと同時に、フシェンが俺の心臓を剣で貫いたからだ。即死だったのだ

ろう。刺された瞬間までは覚えているが、そこからの記憶はほぼない。
俺が最期に見た彼の表情は、一切動かず、その目にはなんの感情も浮かんでいなかった。
けれど確かに彼は間違いなく殺してくれたのだ。あのまま火あぶりにされていたら壮絶な苦痛と共に死を迎えただろう俺を、救ってくれた。一度目の人生で、誰かが救ってくれたのはあの瞬間だけだった。
「その相手が、今度は俺の護衛……か」
改めて彼に会ったが、違和感があった。
一度目の人生で出会ったフシェンとは明らかに様子が違う。前も聖騎士ではあったが、あれほど熱心な教徒ではなかったはずだ。
評判も、容赦ないというところは変わらないが、以前はもっと畏怖に満ちた言われようで、万人に対して非情だった。
俺が直接見た印象もそうだ。この世のすべてがどうでもいいといったような態度と目をしていた。それこそ聖騎士でありながら、神すらどうとも思っていないような……
俺はベッドの上で寝返りをうち、仰向けになる。
とその時、〝彼〟の姿がないことにふと気付いて、辺りを見渡した。
そういえば、部屋に戻ってから一度も姿を見ていない。いつもならすぐに現れるのに、どこに行ったのだろうか。
ベッドから立ち上がって捜そうとした矢先、扉が強く叩かれた。

「聖者様。私です、フシェンです」
俺は思わず眉を顰めた。どうやらフシェンが追いかけてきたらしい。俺としては、一日くらいそっとしておいてほしかったのだが……無理な話か。
「こちらに戻られたのは知っております。中に入れていただいてもよろしいでしょうか？」
……さて、どうするか。
ここにいるのは知られているが、今は自室に迎え入れたくない。それなら、このまま無視してしまおう。次に会った時は寝ていたなどと言い訳すればいいだろう。
俺は口を閉ざしたまま自室の扉を見つめる。
「……聖者様？　聖者様、いらっしゃいますか？」
それにも答えない。しばらく放置しておけば、諦めて勝手に去るだろう。
しかしフシェンは俺の予想を裏切り、ひたすら扉を叩き続ける。
「聖者様、声をお聞かせください。何かありましたか？」
その声には焦りも苛立ちもなく、無機質な声色で繰り返し呼び続ける。さすがに不気味で恐ろしいと思えてくるほどだ。
叩く音は段々と激しさを増していく。……いや、これ以上はさすがにまずい。
シャウーマ神の像だけでなく、この教会堂は全体的に老朽化が進んでいる。
そして、フシェンには聖の間の重たい扉を軽々と開けるほどの力がある。
つまり、このままでは――

「少し、待っ――」
慌てて止めようとしたが、一足遅かった。
扉の蝶番が嫌な音を立て、外れると同時に扉が大きく傾く。そしてついに倒れてしまった。
いとも簡単に自室の扉が壊れてしまい呆然としていると、フシェンと目が合う。
「ああ、申し訳ありません、聖者様」
フシェンは穏やかな微笑みを浮かべたままだ。どう見ても悪いと思っているようには見えない。
彼は室内には足を踏み入れず、その場で片膝を床に突いて頭を下げた。
「お怪我はございませんでしたか？　聖者様の身に何かあったのではと思い、乱暴に扉を開けてしまいました。お許しください」
「……申し訳ありませんが、イザリオティス卿」
「フシェン、と気軽にお呼びください。聖者様が私に敬語を使う必要はございません」
俺は聖者ではないと言い返したいところだが、彼には何を言っても無駄なような気がする。
とりあえず、このままでは話すにもいろいろと不便だから、受け入れよう。
「……わかった、フシェン」
渋々ながら俺が彼の名前を呼ぶと、彼の唇がわずかに開き、頬がほんのりと赤くなる。その表情はどこか夢心地で、静かに幸せに浸っているようだった。
「わ、悪いが、このまま話すにはいろいろと不都合があると思う。ひとまず部屋に入って扉を戻してくれ」
「かしこまりました」
フシェンはすぐに立ち上がると部屋に足を踏み入れ、倒れた扉を持ち上げた。当然直すことはできないため、扉は入口に立てかけただけだ。俺の部屋が酷い有り様だ。
「……」
「……」
部屋に入ったフシェンだったが、再度跪き頭を下げると動かなくなった。どうやら俺の言葉を待っているようだ。
俺としては、聖者になりたくない。
しかしそのためには、自分が聖者ではないという証明が必要だ。現状、それを証明する手段はない。
そうなると、聖騎士の護衛は絶対だ。
運の悪いことに、側にいる聖騎士はフシェンしかおらず、どうあがいてもしばらくは彼が俺付きの聖騎士になるのは確定なのだ。
――なら、せめて。
「……少し話を聞いてほしい。俺はまだ自分が聖者だとどうしても信じられない」
「お気持ちお察しします」
フシェンは俺の声を聞き、頭を上げて笑みを浮かべた。
「ああ、ありがとう。だからこそ、先ほど伝えた通り、自分を落ち着かせるためにもしばらく一人

で考える時間が欲しい。わかってくれるだろうか？」
「と、言いますと……？」
「俺が部屋に籠っている時は、そっとしておいてほしい。俺が呼ぶまで何もしなくて構わない。今みたいに呼びかけたり、中に入ろうとしたりしないでほしいんだ」
フシェンは、俺の言葉に数拍黙りこむ。
そして、先ほどから浮かべている笑みを一切崩さずに、静かに頷いた。
「かしこまりました。聖者様のご意向に従いましょう」
深々と頭を下げた礼儀正しいその所作は、まさしく聖騎士に相応しいといって差し支えないだろう。
しかし俺からすれば、はっきり言って、胡散臭い。
俺を真っ直ぐに見据える翠色の目には、今はなんの感情も見えない。
先ほどまでは陶酔しているかのような表情だったが、今は口許が綺麗に弧を描いているだけだ。
声に悪意はないが、善意も含まれていないように感じる。
その変化が、とても不気味に感じてしまう。
前の人生も今の人生も、フシェンが考えていることはまったく理解できない。
だからだろうか。扉の破壊のこともあって、少しでもやり返してやりたいという気持ちが湧いた。
そしてその気持ちを抑えきれず、無意識に口が動いた。
「先ほど聖の間で、自分の掌を刺す時に笑っていただろう。あれは、なぜだ？」

フシェンは俺の言葉に瞠目した。しかしそれはわずかな間で、すぐに先ほどと同じ一流の役者が見せるような笑顔になった。
「よく見ておいででしたね」
もう少し動揺したような様子が見られると思っていたから、なんだか肩透かしを食らったような気分だ。
「そうですね。別段隠していることではありませんので、聖者様には先にお伝えしておきます」
フシェンはゆっくりと立ち上がる。そして自分の胸に掌を添え、俺の顔を覗きこんだ。彼の瞳は、深い湖のようだった。表面が静まり返り、波一つ立たない。
俺はどうにかして感情を読み取ろうとするが、ただ空虚感が広がっているだけにしか見えなかった。
「私は、死にたいのです」
「……は？」
フシェンはさも普通で当然のことを言っているような口振りだった。たとえるなら、自分は男性だと告白したかのよう。
――死にたい？　こいつ、今死にたいと言ったのか？
「し、死にたい？　何を言っている？」
「ただ事実を口にしただけです。私は早く死にたい。ですからあの時笑ったのは、少しでも死に近づけたようで……嬉しくて、つい」

「ま、待ってくれ。理解が追いつかない。優秀な聖騎士である君が、死にたい？」
するとフシェンはわずかに睫毛を伏せ、少し困ったように眉尻を下げた。
照れているように見えるが、どうにも今の状況には似つかわしくない。
「誤解していただきたくないのですが、自分の境遇を嘆いてこのようなことを言っているわけではありません」
混乱している俺を放置して、フシェンは笑った。その笑顔は今までのものとは少し違う。
頬をほんのり赤らめ、唇は自然と弧を描いている。陶酔しているように見つめる先は俺を通り越して遥か先だ。
「神官でもある聖者様ならご存じでしょうが、我々が死ぬと最後の審判にかけられますが、そこにシャウーマ神が現れると言い伝えられております」
それなら俺も知っている。シャウーマ教の聖典にも書かれている内容だ。
信者の死後、シャウーマ神は信者の生前の行いを裁き、これからの魂の在り処を決めると言われている。
「私はそこで、シャウーマ神にお会いしたい」
フシェンは自分の胸の前で、祈るように手を合わせる。
「私はあの方の声を聞きたい、あの方の瞳に映りたい、名前を呼ばれたい。そして願わくは、側に存在することを許されたい」
熱に浮かされたように蠱惑的に語る声、恋をしているかのように紅潮しきった頬と、感情を隠すことのない表情。
まるで人形が人間になったみたいだ。
だからこそ、言葉が出てこない。
――こいつは、本気だ。
フシェンは本気で、信仰する神に早く会いたくて、命を投げ出したいと思っているのだ。
会える確証もない神を心から信じ、今の生を放り出したいなど、異常だ。頭のネジが外れている。
「だからこそ、死にたいのです。ただ死ぬだけであの方に会えるのならば、喜んで今すぐ喉を掻き切るのですが……それは許されません」
シャウーマ教は自死を禁忌としている。聖典には、自死を行うとシャウーマ神に見放されると書かれているが、どうやらそれを信じているようだ。
「しかし、誰かのための死であるならば、それは素晴らしい行いと言えるでしょう？」
その言葉で、フシェンが何を考えているのかを、わずかに理解できた。
聖典には、自己犠牲を賛美するような箇所がある。誰かを守るための死、誰かを説得するための死は自死には当てはまらないと考えられているのだ。
つまり、フシェンはシャウーマ神に会うために常に死にたいと思っているが、そのためには自己犠牲であったという言い訳が必要、ということだ。
「笑った理由をご理解いただけましたか、聖者様」
先ほどまでの感情的な様子は消え去り、貼りついたような笑顔が彼の顔に戻っている。俺は、咄

嗟に言葉が出てこず、ただ頷いた。
俺からすれば信じられない思考だ。俺は、神なんてものにいい感情を抱いていない。何をすればこんなに信頼できるのか、まったくわからない。
「さて聖者様。申し訳ありませんが荷物をまとめていただけますか？　この部屋は聖者様に相応しくありません」
俺は部屋を見回す。個人的には住み慣れた自室を離れたくないのだが……確かに、この部屋は聖者が住むには警護や刺客などいろいろと問題があるだろう。扉もつい先ほど壊れてしまったし。
「すでに、別の部屋を手配しておりますので、そちらへ移動いたしましょう」
「……待ってくれ。準備には時間がいる。明日の朝、また迎えに来てくれるだろうか。それまでに荷物をまとめておこう」
「お手伝いいたしましょうか？」
「いや、大丈夫だ。一人で問題ない」
きっぱり言い切ると、フシェンは眉一つ動かさずに頷く。そして「部屋の外で待機しております」とだけ言い残して、扉を外して出ていった。もちろん、扉は同じ位置に戻されてはいるが壊れたままだ。
明日の朝まで時間があるとはいえ、今すぐに荷物をまとめるべきだ。
だが、その前にやることがある。
俺は、フシェンが出ていったのをしっかりと確認した後、ベッドの下に腕を突っこんだ。

出てきたのは小さな古ぼけた手帳だ。挟んでいたペンを右手に持ち、手帳を開く。
その時――ベッドの枕が何もしていないのに大きく動き、枕の下から何かが現れた。
それは手だった。それも手首までしかない、左手だ。
傷一つない綺麗な手は俺のより一回り小さく、十歳くらいの手に見える。手首から体側は何も存在しておらず、ただ金色の霧のようなものが立ち上っているのみ。
そのような物体がゆっくりと枕の下から這い出て、こちらへ向かってくる。事情を知らない者が見たら、叫び声を上げて卒倒するだろう。
しかし俺にとって、〝彼〟は特別だった。
「ゴート……そんなところで寝てたのか」
声をかけるなり、金色の霧が大きく膨らんだかと思うと、弾けて砂のように散る。そして俺の眼前に広がり、空中で文字の形を作った。
『ねえ、レダ。僕のこと、嫌いになったの？』
「なぜ、そうなるんだ」
扉の前にはまだフシェンがいるはずなので、できる限り小声で話しかけた。
〝彼〟と呼んでいいのかわからないが、彼はこうして文字を書いて意思疎通を行う。名前がないのは呼ぶのに不便だと、ゴートという名前をつけた。
先ほどの文字が溶けるように消え去り、新たな文字が宙に書かれる。
『帰ったのにすぐ呼んでくれなかったし……今も、ほら』

左手――ゴートが人差し指でくいくいと示すのは、ペンを持った俺の右手だ。
『やっぱり、レダも右手がよかったんだ。だって僕、左手だもんね。嫌いになったんでしょ』
「前から言ってるが、その右手に対する劣等感はなんなんだ？」
『いいよ、わかってるよ。僕はいつも二番手だ。レダだって、物をしっかり掴むのはいつも右手だし』
ゴートはいつもこんな風に右手に劣等感を抱いており、性格もかなり消極的。俺が強制しない限り、この自室に籠りっきりだ。
なぜ籠りっきりかというと、人間が怖いからしい。
しかし彼は特別な存在なので、物や人に干渉できつつも、普通の人間から認識されることはない。つまり普通の人間には見えないのだから、怖がる必要はないと思うんだがな。
「待て待て。とにかく、嫌ってない。それよりまずいことになった……聖遺物のせいで、聖者にされそうなんだ」
『え、なんで聖遺物を触ったの！　というか、どっちの手で!?』
「おい。いい加減、本気で怒るぞ」
俺が低い声で告げると、ゴートは四本の指を前にゆっくりと曲げた。それは謝罪する時に頭を下げる動きのようだ。相変わらず仕草が細かい。
「俺は周りから嫌われているから、今回の清掃について誰にも教えてもらえなかったんだ。まさかあれが聖遺物だなんて、知らなかった」

滅多に開かれない聖の間は、元々、聖遺物を収めるための部屋だったんだろう。俺としてはこんな辺境にある教会堂に聖遺物があったこと自体が驚きだ。
『聖者にされるのはまずいよ。聖者になるということは、レダの側には常に聖騎士がつくってことだよ？』
そう、俺が聖者になりたくない最大の理由はそこだった。
とはいえ、先ほどフシェンに一人の時間を邪魔しないでくれと伝えたので、大丈夫だと信じたい。
『本当に大丈夫？　聖者なんてやってる場合じゃないよ。だって今のレダは聖者じゃなくて』
ゴートが書く金色の文字が、すっと消えていく。そして次に出てきた文字を見て、俺は眉を顰めた。
『この国の神様なんだから』

◆◆◆

『神様のクソ野郎、役立たずが』
そう神を罵って、俺の一生は終わった。
最後に俺が見たのは、虚空を見つめているような翠色の瞳と、赤い炎だけだ。彼に刺された苦痛は一瞬だったと思う。すぐに暗闇が視界を包み、そのまま意識が溶けていく。
そうして、永遠に目覚めることのない眠りにつこうとした時だった。

「そこまで言うなら、君がすればいいじゃん」
そんな不機嫌そうな声で俺の意識は戻った。目を開くと、先ほどまで感じていた熱さや痛みは消えており、何事もなく起き上がることができた。
辺りを見渡すと、どこまでも白い空間が広がっている。空や地面も真っ白で、何も存在していない――前方にあるものを除いて。
俺の前方に十数段ほどの階段があり、その先に金に輝く椅子があった。
そこに、誰かが座っていた。
「ねえ、聞いている？」
問い詰めるような言葉は、椅子に座った相手からだった。
十代になったばかりかという年齢に見える子供だった。金色の髪に、透き通った空色の瞳。中性的な顔立ちで性別は判別しづらいが、とりあえずは少年ということにしておく。
ただ、ぞっとするほど美しかった。
「き、聞いてるってなんのことだ？　というか、俺は死んだのではなかったか？」
先ほどのことは夢じゃないはずだ。俺は悪の公爵として処刑された。
しかしどれだけ体を調べても、特に異常は見られない。いやでも、確かに死んだはずだ。
混乱している俺の耳に、大きい溜息が届く。
「死んだよ。だからここにいるんじゃないか」
「何？　待ってくれ……だから、ここ？」

死んでここにいるとしたら、ここはおとぎ話にあるような死後の世界ということになる。
それなら、この偉そうな少年は一体誰なのかという疑問が浮かぶが、簡単にわかった。
「……もしかして、神か？」
「……」
少年――神は、何も言わず不機嫌そうに俺を睨みつけた。答えるまでもないということだろう。
ああ、俺の不運はここまで来ると素晴らしいとさえ言える。
とりあえず、座ったままでは無礼にあたるだろうと、急いで立ち上がった。
「……ああ、ええと。申し訳ありません、神よ。あまりにも無礼な態度を」
「やめてやめて。君にそういう態度をされると腹が立つ。普通に話していいよ」
酷い言われようだ。その態度から察するに、俺はやはり神には嫌われているようだ。俺も神が嫌いなので、思いは同じ。よしとしよう。
ところで、彼が神ならば、つまりは唯一神であるシャウーマ神になるわけで。
「その、シャウーマ様と呼んだほうが」
そう口にした瞬間、白かった周りの色が一気に真っ黒に変化した。さらには空色だった神の瞳が真っ赤に染まり、人間ではあり得ないほど爛々（らんらん）とした輝きを放っている。真っ赤に変化した瞳は、目の前の彼が人ではないと嫌でもこちらにわからせるものだった。
「――やめて。次、その名前で僕を呼んだら許さない」
声自体は大きくないのに、なぜか頭の中で大きく響き渡る。人間には到底発することのできない

圧力と光景に、彼が神だと改めて理解した。
突如起こったその変化に寒気を覚え、雰囲気に呑まれて固まっていると、少ししてから黒が真っ白に戻っていく。神の様子も先ほどと同じように空色の瞳に戻っていた。
「……はあ。君さ、死んでるってわかったのに、妙に冷静だね」
「いや、先ほどから内心は混乱して吐きそうだが」
言った通り、俺の内心は混乱の真っ只中だ。額は汗で濡れてるし、心臓だってうるさい。少しでも油断したら、叫び出しそうだ。
それでもこうやって平静を装えるのは、今までの不運のおかげでとんでもない場面によく遭遇していたからだ。そういう時は慌てふためくよりも、表面だけでも平静でいるほうがうまく凌げる。
「ふうん」
聞いておいて、神は一切興味がなさそうな相槌を打ってくれる。
「まあ、いいや。それで、君がやってくれるんだよね？」
「それは先ほども聞いたな。やってくれる、とはなんのことだ」
「君が僕に言ったんだろ――神様のクソ野郎、役立たずが、ってね」
しんと気まずい静寂が流れる。さすがの俺も、笑って誤魔化すのは無理だった。
金色に輝く玉座に足を組んで座る神は、いまだに不機嫌さを隠そうともせず俺を見下ろしている。
確かに言った。間違いなく言った。
しかし、あれはほぼ八つ当たりであって、決して本音ではない……ことはないな。

「思い出した？　僕も悠々自適に神様をやっているわけではなくてね。人間だけじゃなくて、すべての生物の面倒を見なくちゃいけないんだよ。なのにそこまで言われるなんて……って嘆いた時に思いついたんだ。それじゃあ、やってもらおう、って」
「い、いやいや、待ってくれ。うまく話が呑みこめない。た、確かにあなたを侮辱した。だからってやってもらうって……いや、そもそもやってもらうとはどういう意味で……」
「だからさ――神をやってよ」
まるで簡単なお願いをするように、神は軽々しくそう口にした。でも、俺にはその言葉がまったく理解できなくて、黙りこむしかできない。
神をやる？　やるってなんだ。
「そうだな、仮の神でいいよ。報酬はやり直しでいいね。そうだな、五歳の時くらいでいいかな」
「……何？」
言っている言葉はわかるのに、やっぱり理解できない。
仮の神ってなんだ。やり直すってどういうことだ。死後の世界にいることだけでも混乱しているのに、さらに難題を頭に詰めこむ余裕などなかった。
俺は口を開いたまま固まることしかできない。辛うじて間抜けな声だけは絞り出せた。
「神をやってもらう代わりに、悲惨な人生をやり直しさせてあげるってことだよ。わかったらとっとと……」
「待ってくれ！　まだ、何も理解できていない」

神が気怠そうに腕を上げた瞬間、俺の全身がまずいと叫んだ。このままだとわけがわからないまま放り出される予感がしたからだ。

しかし、神は露骨に嫌そうに眉を顰めた。どうやら心底嫌われているらしい。

「君相手に詳しく説明するの……？　なんか腹立つな。ったく」

神は溜息をつきながら、ふいに左手を上げた。

そして反対の手を振り上げると――左手を切り落とした。

「げっ！」

目の前の暴挙に目を覆いたくなったが、切り口から血が出ることはなかった。それどころか、断面は光り輝いており、明らかに人間のそれではない。

そして左手は階段を転げ落ち、綺麗に俺の前に転がってきた。

さすがに俺も後退（あとずさ）る。黙って切り落とされた左手を見つめていると、突然指先がぴくりと揺れた。

そして、指先に力を入れて、ゆっくりと動き始めた。

「ぎゃっ！」

「うるさい」

「いや、うるさくもなるだろう！　切り落とした手が動いてる！」

「僕の手だから、当たり前だよ」

そんな世界の常識みたいな言い方をされても俺が知るはずがない。予想以上の出来事が次々と起こり、表面を取り繕（つくろ）うのも限界だっていうのに。

俺が叫んでいる間に、左手は床に突いた五本の指をピンと伸ばした。まるで立っているようだ。しばらくはそのままだったが、俺がじっと見つめていると、突如くるりとひっくり返り、掌をこちらに見せてきた。

「ほら。君に腹を見せてるよ、よかったね」

「見せてるのはただの掌だ！」

犬が主人に懐く時に腹を見せるのと一緒とでも言いたいのかもしれないが、到底そうは見えない。すると左手は再度指先で立ち上がり、器用に親指を動かして自身の手の甲を撫でた。いやあ恥ずかしい、と言わんばかりで、妙に人間味がある。

ふと神を見ると、先ほど切ったはずの左手は何も変わらずにそこにあった。いつの間にか元通りになっていることに愕然（がくぜん）とする。いろいろなことに思考が追いつかない。

「とにかく、その手は君にあげる。詳しいことはそれが教えてくれるから」

「は!?」

「これで大丈夫だよね、ならさっさと」

「い、いや、まだだ」

神が話を終わらせたがっているのはわかっていた。ただ俺としてはどうしても譲れないことがあった。再度引き止めた俺に対して、神はまた露骨に眉を顰める。

「今度は、何？」

「報酬の件だ。俺は……やり直しなんてほしくはない」

先ほど神が提示したのは、人生のやり直しだ。俺は騙され、すべての罪を擦りつけられ、処刑された。

確かに、もう一度やり直せばうまくやれるだろう。あんな風に処刑されず、平穏に生きていけるかもしれない。ただ、俺にとってそれはまったくありがたくなかった。

「やり直しても、またあんな風に終わるのか？　誰も側にいないのか？」

結局、最後まで愛というものを一切知らない人生だった。

孤独に生きて、一人で死んだ。友人も、恋人もおらず、家族にすら見捨てられた。

俺は今まで、不運のせいで自分の心まで壊されてたまるものか、と思って生きてきた。おかげで何事もいいように考えて生きるのが癖になっていた。

せめて自分だけは自分を愛するようにと、自分を卑下することも、無下に扱うこともしなかった。

だが、諦めたわけではなかった。

俺はずっと、ずっと……

「――誰かに、愛されたい」

思った以上に弱々しく、掻き消えそうな声が出てしまった。

大勢に愛されたいとは望まない。一人だけでもいい。決して変わらない愛というものが欲しかった。

――俺が存在してよかったと、俺の生を喜んでくれる誰かと会いたかった。

神は一瞬眉根を寄せたが、すぐに何もなかったような顔で俺を見下ろした。

「残念だけど、時間が戻っても君のそれは変わらない。それらは君に与えられた〝罰〟だからね。それは君を孤独にして、愛を奪う」

「……」

「君と接する者は、どんな些細なことでも君に嫌悪感を募らせ、見知らぬ者は勝手に君を誤解して嫌う。君が相手にどんなに好きになってほしいと望んでも、不運や誤解が重なり、望む愛は永遠に得られないよ」

「はっ」

俺の口から無意識に乾いた笑いが零れた。

不運が愛を奪っていくことにはなんとなく気付いていた。いつだって周りに誤解され、嫌われ、弁解は決してうまくいかない。

「それは、僕でさえどうにもできない。このまま死んで生まれ変わったとしても、何も変わらない。これは君の魂に刻まれたものだ」

「……」

思った以上に壮大な罰だ。それなら、俺がやり直しの機会を得ても、孤独に死んでいくのは確定ということか。

「――ただ、それを消す方法がないわけではないよ」

「何……？」

目を見開いて神を見ると、彼は口角を吊り上げ意地悪く笑った。

その表情は神より悪魔と言ったほうが相応しい。
「それはね――」

◆◆◆

ふっ、と意識が浮上する。目を開けてぼんやりと窓のほうを向くとすでに外は明るくなっており、フシェンと約束した朝がやってきたのがわかった。
「嫌な夢を見た……」
あれは、俺が一度目の人生で死んだ後に本当にあったことだ。
あの後、神から切り落とされた左手――ゴートと共に五歳から人生をやり直すことになり、成人として認められる年齢になったと同時に教会に入り神官になった。
一度目の人生では、父親や兄に愛されたくて別邸にしがみついていた。その結果が火あぶりだ。なら今度は俺から捨てればいいと考えたというわけだ。
普通この国の貴族は神官にはならない。教会に属する神官になる場合、家名を捨てることになるからだ。
例外もあるが、それは一家から見捨てられた問題児だけ。つまり、実質的には追放だ。神官たちが俺を問題児として嫌う理由はここにある。
俺としては、家名を捨てれば家を継ぐことはできないし、教会の一員になれば再度処刑されるようなことになるとしても、いち早く教会の動向を探りやすくなるだろうと考えたのだ。
できる限り大人しく過ごしたかったのだが、俺はうっかりと聖遺物を触ってしまった。今の俺は仮とはいえ神だから、当然聖遺物は反応する。
その時あることを思い出して、枕の下に入れておいた古ぼけた手帳を取り出した。
「寝る前に書き損ねたからな……」
手帳をベッドの上で開いて、挟んでいたペンを今度は左手で握りしめる。利き手ではないが、ゴートがまた拗ねるかもしれないからな。字は汚くなるが仕方ない。
俺は空白のページに、ペンを滑らせた。
『レダってば、また書いてる……』
俺が起きたのに気付いて、ゴートがもぞもぞとシーツの端から出てくる。そして、嫌がらせのように金色の霧が俺の目の前に広がった。
邪魔なそれを手で軽く払いながら、ペンを走らせる。
俺が今書いているのは、聖の間で俺に文句を言った神官のことだ。なんと言ったか、どういう容姿だったか、どういう声だったか、知っている限りの特徴を書いていく。
こういうのは早めに書いておかないといけない。記憶は時間と共に薄れるものだからな。
この手帳には、俺に対して嫌がらせをしたり悪口を言ってきた人間のことが書かれている。名前を知っているのなら名前も書いて、何をされたかを記録しているのだ。
これは、俺が彼らを忘れないためのものだ。

ただ、これは復讐のために記録しているわけではない。
『ねえ、レダ。僕は自分のこと嫌いな人間なんて大嫌いだよ？　なのにレダは本気で、そんなやつらと友人になりたいの？』
――そう、これは俺が友人になりたい人たちの一覧だ。
ゴートが苛立ったように手帳に書かれた名前を指で叩く。宥めるために手の甲を指先で軽く撫でると、ゴートはそれが嬉しかったのか、すぐに大人しくなった。
「そうだ。俺の望みが叶ったら、ちゃんと彼らのことを知りたいんだ」
ここに書いている人たちは、誤解で嫌われた者、噂を聞いて嫌われた者、俺の不運に巻きこまれた者ばかりだ。今の俺では弁解も和解もできやしないだろう。
……だが、もし罰がなくなったら？
彼らと分かり合えるかもしれない。それでうまくいったら、彼らと友人になってみたい。
「もしかしたら、ここから友人が三人はできるかもしれない！　いや、さすがに欲張りすぎか？」
『こんなにたくさん名前があるのに、三人なの……？』
ゴートが呆れた様子で、ひらひらと手を振っているのが見えた。
ゴートは友人というものを甘く見ている。
俺は最近、友人を作るための本というのを読んだ。そのような本が必要になるほど、友人作りというのは難しいのだ。むしろ三人としたのは俺の自信の表れでもある。
しかし、これまでに何人くらい書いただろうか。人生をやり直した五歳の時から書いているから、相当書いたはずだ。
昨日の神官のことを書き終えた後、ふと数が気になり最初のページを開く。
最初のページの一番上に書かれた名前を見て、思わず指を止めた。
【フシェン・イザリオティス】
――ああ、そうか。
思い出した。やり直した俺が初めて友人になりたいと思った人間が、彼だったんだ。
前の人生で俺が苦しむ前に殺して助けてくれたフシェンのことを知りたかった。助けてくれた理由を聞きたかった。
だが、どうにも無理そうだ。どういうわけか、前のフシェンと今のフシェンはまったくの別人だからな。
胸の奥が重くなる感覚を味わいながら、古くなった紙にそっと触れ、彼の名前をなぞった。
「……やめだ」
今の俺に、感傷に浸る時間はない。
胸の辺りに広がる不快感を振り払うように、勢いよく手帳を閉じると、すぐに準備しておいたバッグに突っこんだ。
「ゴート、そろそろ時間だぞ」
俺の声に反応して、いつの間にかベッドに埋まっていたゴートがもぞりと動き出す。そこで何回か跳ねると、ふわりと宙に浮いた。

ゴートはこうして浮くこともできる。神の左手というのは便利なものだ。しかし、俺しか見えないとはいえ、左手だけがふよふよと浮いているのを他の人間が見たら卒倒するだろう。
彼は、俺と出かける時の定位置になっている左肩に乗ると、きゅっと丸くなる。
その時、ちょうど壊れた扉がぎしぎしと叩かれた。
「お迎えに参りました、聖者様」
その声は、迎えに来たフシェンのものだった。

◆◆◆

朝の光が、横並びに設けられた小窓から差しこんで、細長い廊下を照らしている。
古い教会堂のため、石造りの壁は古く、豪華な調度品も置かれていない。
新しい部屋は俺が寝泊まりしていた棟とは別の棟に配置されているようで、まあまあの距離を歩くことになる。
歩き慣れた教会堂なので一人でも目的地には行けるが、フシェンはずっと俺の隣を歩いていた。それも少し肩を動かせば当たるほど近くに。狭い廊下とはいえ、いくらなんでもここまで寄り添う必要はない。
そのせいでフシェンから結構な圧を感じるのだが、とはいえそれは距離が近いということだけでなく、彼がずっとこちらを見てくるからだろう。

しかも、湿度を感じさせるようなじっとりとした視線が俺に絡みつくものだから、並んで歩いているだけなのに、どうも落ち着かない。
それでも、彼とはできる限り関わりたくないので気にしないでおこうとしたのだが――
「今日は、何もお話しされないのですか？」
話しかけられては答えるしかないので、仕方なく口を開く。
「君は、俺に興味があるのか？」
俺が喋り出すと、翠色の目が心から嬉しそうにきゅっと細くなる。
――まただ。
フシェンの瞳の奥がどろりと溶けて、暗い闇を覗かせる。頬をわずかに赤らめ、かすかに目を潤ませた表情は、ただでさえ顔の造りがいい彼がすると犯罪的な色香を漂わせる。
しかし彼は、俺の問いかけにはただ綺麗な微笑みを返すのみで何も答えなかった。俺に興味はないというような素振りだ。
……こいつは、本当になんなんだ。
だから俺もまた黙ったまま少し歩くとフシェンはまたしても落ち着かない様子を見せ始めた。
「歌などを歌う予定は、ございますか？」
「……は？」
「それか、もしよろしければ一方的にお話をしていただけませんか。なんの話でも構いませんので」

『レダ、レダ！　助けて！　こいつ、やだあ！　なんか怖い！』

ゴートの金色の霧が、俺の目の前で助けを求める文字を形作っては消えていく。

フシェンが横を歩きながらこちらの顔を覗きこんでくるので、ゴートからすればすぐ間近に彼がいて、彼の狂気じみた視線をもろに受けるのだろう。仕方ないので、左手でゴートを胸のところで抱えてやった。

それでもフシェンとの距離が近いせいか、ゴートは二本の指を動かしてしっしっと追い払うような動作をしていた。

「すまないが、歌は興味ないので歌わないし、一方的に話すのも好きじゃないんだ」

「そうですか」

フシェンはあからさまに残念そうにしたが、すぐに何か考えごとを始めたようだ。

一体何を考えているのか、と気にはなるが、常に微笑みを湛えながら死にたいと願う男の考えなどわかるはずはない。けれど、前世のこともあってどうにもフシェンのことが気になってしまう。

――というか、本当に俺から目を離さないな、こいつ。

突き刺さるような視線を感じて、背筋がぞっと冷える。前をちゃんと見ているのかと聞きたくなるほどの視線が気になって仕方ない。

廊下の突き当たりまでいくと、下へ続く階段にさしかかった。石造りの階段をそのまま下っていくが、フシェンの不躾すぎる視線に限界を迎えた。

「君、いい加減に――」

注意でもしようかと振り向いた瞬間、俺は姿勢を崩した。ぐらりと体が階下のほうへ傾く。

――まずい、っ！

このまま階段から落ちたら、大怪我をして動けなくなる。それだけはまずい。

咄嗟に手を伸ばすが掴むものがあるはずもなく、階下に向かって落ちそうになった時。

ぐっと腰をしっかりと支えられ、手首を掴んで引き寄せられた。息が当たりそうなほど間近にあるのは翠色の瞳だ。

「お怪我はございませんか」

フシェンが階段から落ちそうな俺をすぐさま助けてくれて、ほっと安堵の息が漏れた。

さすが聖騎士と言うべきか。階段という不安定な場所でも彼の体幹はしっかりしており、安心感があった。

「……すまない、ありがとう。助かった」

感謝の言葉は大切だ。フシェンがいなければ、間違いなく階段を転げ落ちていたのだから。

しかし、フシェンは俺の言葉に返答することはなく、ただ黙ってじっと俺を見つめる。その時、深く、底が見えないような暗さを持つフシェンの瞳に喜悦が満ちたのがわかった。

「うわ、っ！」

次の瞬間、フシェンは俺の体をいとも簡単に抱え上げた。俺の膝の裏に片腕を回し、もう片腕は背を包む――いわゆる横抱きだ。

「い、一体、何を！」

「聖者様付きの聖騎士として、これ以上聖者様を危険に晒すわけにはいきませんので、体に触ることをお許しください」
「いや、待て、自分で歩ける！」
「申し訳ありませんがその姿勢では危険ですので、私の肩に顔を預けて話してくださいますか」
危険と言われると、変に暴れれば落とされるのではという考えが頭をよぎる。そうなるともはや、大人しくするしか選択肢がない。
俺は、今日だけは動けなくなるわけにはいかないしな。
渋々ながら、フシェンの言葉に従って彼の肩辺りに頬を押しつける。そうするとどういうわけか、彼は俺の口許に耳を寄せてきた。
そこまで近づけなくとも、聞こえるはずだが。
「……フシェン」
呆れたように名前を呼んだ瞬間、俺を抱き上げる腕が小さく震える。そのまま動かなくなってしまった。
こちらから彼の表情は見えないが、耳まで真っ赤に染まっているのは見えて、なんとも気まずい。
――よくわからないが、もう何か言うのはやめよう。
そう思って、フシェンに抱きかかえられたまま抵抗をやめた。
今日は忙しい日だというのに……
そう思いながら、遠くにある雲をぼうっと眺めたのだった。

◆◆◆

その日の夜。そろそろ時間だと、俺はゆっくりと立ち上がった。
ここはフシェンが用意してくれた俺の新たな自室だ。
当然、以前まで俺が過ごしていた自室とは比べものにならない広さだ。しかも家具には豪華な細工が施されており、ベッドも以前の部屋にあったものとは違ってふかふかで、今にも壊れそうな音もしない。
俺がこの部屋で一番気に入ったのは、大きな窓だ。俺の身長くらいの窓は以前とは違い、開放感がある。
『ねえねえ……今日くらい休んでもいいんだよお、レダぁ』
その時、もそもそとゴートが俺の肩へ登ってきた。金色の霧の文字が普段よりも読みづらいところを見るに、ゴートは眠いようだ。それでもなんとか俺の肩に乗った彼は、金色の霧を俺の頭上に広げた。
「悪いが、俺の望みを叶えるためにも休むわけにはいかない」
そっと窓に触れると、指先が段々と透けていく。掌も透け始め、掌の向こうに床が見えた。
侵食するように、ゆっくりと全身が透明になっていく。窓に映っている俺を見ると、全身が段々消えていくみたいだ。

窓の向こうに広がる夜空に視線をやると、緑色に輝く小さな星――ナヴィの星が見える。
俺はそれを睨みつけ、唇をぎゅっと一文字に引き結んだ。
あの神に任された業務は、月に一度、ナヴィの星が見える夜に人々の願いを聞き、俺が叶えて奇跡を起こすことだ。
シャウーマ神は人の願いを必ず叶える神とされ、ナヴィの星が出る夜に心から願えば、一生に一度だけ、人の願いを叶えてくれる……俺も乳母からよく聞かされた伝承だ。
だからこそ、俺はその夜だけ人の願いを叶える力が扱えるようになる。
与えられた神の力はほぼ万能だ。俺の望む通りに実現してくれる。どこにでも一瞬で移動できるし、どんな重病人でも治せる。できないことといえば、死んだ人間を生き返らせるくらいだ。
ただ、神の力には制限がある。
それは、人の願いを叶えること以外に使ってはいけない、というものだ。それも切実な願いでなければいけない。つまり、俺だけの意思で好き勝手には使えないのだ。
さらに、俺が神であると誰かに教えることも当然できない。……まあ、このダイトヤで「俺は神だ」なんて口にしたら、即刻牢獄送りになるだろうけれど。
とにかく、この神業務を行うために、俺は一時的に神になれる、というわけだ。
ちなみに、自分自身ではわからないが、ゴートが言うには神の時の姿は精神年齢に引っ張られ、俺が一回目に死んだ二十五歳くらいの見た目だそうだ。
人間としての体がなくなるので、鏡に姿が映らなくなるし、ゴートと違って誰かに物理的に干渉することもできない。普通の人間は俺を視認できないし、誰にも俺の声が届かなくなる。
なんとその状態が、日が昇るまで元に戻らないのだ。
もし、日が昇るまでに誰かが部屋に入ってくると、たとえ俺がいたとしても、部屋に誰もいないように見えてしまう。
前ならともかく、今の俺は聖者候補ということになっている。いないとなれば、大ごとになる。
「……大丈夫だろうな？」
俺は思わず、扉のほうに目を向けた。フシェンが今、扉の前で警護をしている。
先ほど彼が挨拶に来た際に「一人にしてほしいから、許可なく部屋に入らないでほしい」と念押ししたが、どうにも信用ならない。
しかし、俺はこの神業務を中止するわけにはいかない。
神に命じられたから、という理由だけではない。
俺の不運を消し去るために、どうしても必要なのだ。
俺は目を閉じて、耳を澄ます。意識を集中させると、しばらくして声が聞こえてきた。
純粋な望みが詰まった、神に聞こえるほどの切実な願いだ。
では、この声の持ち主の願いから叶えるとしよう。
声の主はすぐ近くにはいないが、意識を傾ければどこにいるかすぐにわかる。そこに移動するのも一瞬だ。
目を閉じ、数秒息を止める。

目を開けると先ほどいた部屋ではなく屋外で、石畳の道の上に立っていた。吹き抜ける風は強く激しい。だがそれすら俺には干渉できない。

ここらは平民の住宅地なのだろう。簡素な作りの家々が並んで建ち、窓から仄(ほの)かな明かりを覗かせている。

ふと空を見上げると、降り注いできそうなほどたくさんの星々が夜空に広がっている。

「……早く本物の神にならないと」

ぼんやりと眺めていたら、呟きが零れた。

俺の不運を消す方法――それは、俺が完全な神になることなのだ。

あの時、神は言った。

『人の身であるからこそ与えられた〝罰〟だ。だから、君が本物の神になれば消えるよ。簡単な話だ、君があの国のシャウーマ神に取って代わればいいのさ』

初めてそれを聞いた時に、何を言っているのかと神の正気を疑った。

俺は『ほ、本当にそれでいいのか』と問いかけた。当然だ。目の前にいるシャウーマ神の立場を俺に奪えと言っているのだから。

その時の返答は、今でも頭の中に焼きついている。

神は俺を見下ろしたまま、馬鹿にしたように笑った。

『君にできるというなら――ね？』

そこでようやく、神が俺にまったく期待していないのだと理解した。きっとこれは俺に与えられた餌で、馬の鼻先にぶら下げられた人参のようなものだ。

人参を追って走り続けるように、俺が罰から逃れるために神業務を行う。ただ、最後に餌が与えられるとは限らない。

その瞬間、自分の中で火が点いた。幼い頃からずっと燻(くすぶ)っていたものが、ついに燃え出した。

――なら、遠慮なんてするものか。やってやる。

俺は、欲しい。

よくやったと頭を撫でる手が。

君がいてくれてよかったと褒める声が。

振り払われることなく誰かに体を優しく抱きしめてもらえる両腕が。

俺は、愛を受け、与えることが許される存在になりたいのだ。それを得られる機会が与えられるというならば、自分の手で掴み取るまでだ。

こうして俺は人生をやり直し、神業務を引き受けることにしたのだ。

◆◆◆

『時間的に、彼女が最後だと思うよ』

「ああ、わかってる」

今いるのは、ある家の寝室だ。あまり裕福でない家のようで、隙間風が多い。ベッドの上では夫

立ち読みサンプル
はここまで